

研究論文

国語科教育史における「古典」概念の 成立時期についての一考察

—— 国民科国語における「古典トシテノ国文」からの遡及 ——

八 木 雄一郎*

An examination of the period when the concept of Japanese Classics
was introduced to the Japanese educational system

Yuichiro YAGI

1. 序論

1-1. 中学校教授要目における「国語」および「古典」

本稿の目的は、明治期から今日に至る国語科教育の中で「古典」という概念が成立した時期を検証することである。「古典」の形成過程をたどり、その成立時期を明らかにすることは、国語科教育において『『古典』が一内容として設置されている根拠は何か』『『古典』が担ってきた役割とは何か』『『古典』の成立を可能にした条件とは何か』といった問いに対する回答をもたらすことが期待される。

本稿は、旧制中学校の国語科教育を規定してきた中学校教授要目における「古典」概念の形成・成立過程に着目している。1902(明治35)年に制定された中学校教授要目は、1943(昭和18)年の中学校教科教授及修練指導要目に至るまで、複数回におよぶ改定が行われた。本稿ではそれらを以下のように略記することにした。

- ・中学校教授要目 (1902(明治35)年) = 「要目①」
- ・中学校教授要目改正 (1911(明治44)年) = 「要目②」
- ・中学校教授要目改正 (1931(昭和6)年) = 「要目③」
- ・中学校教授要目中改正 (1937(昭和12)年) = 「要目④」
- ・中学校教科教授及修練指導要目 (1943(昭和18)年) = 「要目⑤」

※信州大学教育学部

この中で「古典」という語が初めて使用されたのは、1943(昭和18)年の要目⑤である。同年に制定された中学校規程において教科の再編成が行われ、従来の国語漢文科は、新たに設置された国民科の中に組み込まれ、「国民科国語」という名称に変更された。その「教授要旨」が要目⑤において以下のように示されている。

国民科国語ハ正確ナル国語ノ理会ト発表トノ能力ヲ養フト共ニ古典トシテノ国文及漢文ヲ習得セシメ国民的思考感動ヲ通ジテ国民精神ヲ涵養シ我が国文化ノ創造発展ニ培フモノトス（下線筆者）

この「古典トシテノ国文」は、要目⑤の中において、「国語」とは区別されながら規定されている。まず、上掲の「教授要旨」に続いて示されている「教授方針」においては、以下のように両者が別の項目として立てられ、それぞれ異なる目的が託されている。

- 一 国語ガ国民的思考感動ノ具現ニシテ且之ヲ形成スルモノナル所以ヲ明ニシ国語ノ正確ナル理会・発表ノ能力ヲ養ヒ国語尊重ノ精神ヲ涵養スベシ」
- 一 古典トシテノ国文ヲ通ジテ皇国ノ伝統ト其ノ表現トヲ会得セシメ国民生活ノ発展ト皇国文化ノ創造トニ培フベシ

さらにそれに続く「教授事項」においては、「古典トシテノ国文」が「皇国ノ道ノ具現タル各時代ノ国文」と言い換えられながら、一方は「講読」、そしてもう一方の「国語」は「文法」「作文」「話方」において扱う内容として区別されている¹⁴⁾。

- 一 講読ハ皇国ノ道ノ具現タル各時代ノ国文ト皇国ノ発展ニ寄与セル漢文トノ中ヨリ醇正ナルモノヲ選ビ之ガ正確ナル読誦ト解釈トヲ課シ教材ニ依リテハ暗誦・書取ヲスベシ
- 二 文法ハ口語法・文語法ノ大要ト国語ニ関スル基本的事項トヲ授ケテ国語ノ正確ナル理会・発表ノ能力ヲ修練シ国語ノ構造及特質ヲ会得セシメ国語意識ノ確立ニ資スベシ
- 三 作文ハ書簡・日記・報告・記録・説明・感想及主張等各種ノ文ヲ綴ラシメ思想・体験ノ正確自由ナル発表ニ付テ指導シ醇正ナル国語ノ表現力ヲ修練スベシ
文体ハ口語文ヲ主トシ文語文・候文ヲモ併セ課スベシ
- 四 話方ハ各自ノ生活ニ則シテ思想・体験ノ正確ナル発表聴取ヲ訓練シ醇正ナル国語ノ使用ニ習熟セシメ敬語ノ使用ニ慣レシムベシ

このように、「日常的に使用する言語文章」といった意味での「国語」に対して、「古典」を区別する扱いは、今日の学習指導要領においても同様である¹²。本稿においても、「古典」を「国語」と対置されながら国語科教育の中に設置されている領域と考え、その領域の内容（範囲）、目的、および教科内での位置づけの変遷を分析していく。

1－2. 「国文学史」の中に見る「古典」

本稿における問題意識は、今日的な意味での「国語」「古典」という区分が成立した時期はいつか、ということである。このような問いが成立するのは、つまり前掲の要目⑤をもってそのまま「古典の成立」とせずに、そこからの遡及を試みるのは、要目①以来の国語教育関連法令における「講読」（「国語講読」）と「国文学史」の中に、「国語」「古典」の形成過程を見出すことができるためである。「国文学史」が国語及漢文科の一科目として設置されたのは1902(明治35)年の要目①である。要目①においては「講読」の内容が「今文」「近世文」「近古文」に限定され、それらを通して日常的に使用する言語文章の軌範（「国語」）を教授することが目指された一方で、第5学年第3学期の内容として「講読」とは別に設置された「国文学史」は、「主要ナル文学時代 顕著ナル文学者 顕著ナル著作物 各種ノ文体、歌体」を扱いながら「上古文学ノ一斑ヲ窺ハシム」科目であると規定された。なお、このとき「国文学史」には、「国民性の涵養」という目的も同時に付与されていた。それは法令上においては明示されていないものの、要目①の原案である『尋常中学校教科細目調査報告』の国語科調査委員であり、「国文学史」の設置に大きな関わりをもったと考えられる芳賀矢一の論稿などから明らかである¹³。その後「国文学史」は、1911(明治44)年の要目②において一度は廃止されたものの、それから20年後の1931(昭和6)年に制定された要目③において、再び国語漢文科の内容に組み込まれることになる。「国語講読」の第5学年に「前学年ニ準ジ尚国文学ノ史的発展ヲ略述シ国民性ノ由来スル所ヲ知ラシムベシ」と示されたのである。要目③の「国語講読」においては、要目①のような時代的範囲の限定がなくなり、上古時代から明治以降に至るすべての時代のテキストを扱うことが認められるようになった。それと同時にこの「国語講読」の中で、「国文学史」的観点からの教授を行うことも明示されている。この際、「国文学史」の教科書は「国語講読」とは別に発行されており、教科書検定も通過している。ここ

から要目③における「国文学史」は、規定上は「国語講読」の一内容という位置づけになっているものの、機能としては「国語講読」から独立した側面も持っていたと考えられる。付言しておきたいのは、この要目③において強調されたのも「国民性の涵養」という要素であったことである。要目③の基調になった文政審議会⁴⁾の「中学教育改善案」(1929(昭和4)年)は「国民精神の涵養に力める」ことを目的として提示されたものであり、その中で具体的に示されたのが、上古文・中古文を「国語講読」の内容として扱うことだった。なお要目③においては、後掲のように、その教授要旨に「国民性ヲ涵養シ」という文言が現れることになる。

このような「講読」および「国文学史」の変遷の中で、「古典」概念の成立時期を検証することが本稿の目的となる。そこで本稿においては、要目⑤において「古典トシテノ国文」が明示された要因を明らかにし、それが「古典」概念の形成過程において持つ意味についての考察を行う。そのために『国語教育』『国語教育誌』などの国語教育専門誌や、『国語と国文学』『国文学解釈と観賞』『文学』などの文学研究の専門誌に掲載された種々の論稿を資料として用い、当時の思潮を読み取ることにする。さらに、教科書検定を通過した教科書の教材構成の変遷なども参照する。そして、「古典」をめぐるどのような議論が展開され、要目⑤に至るのかということを分析していきたい。そして要目⑤に対して、それ以前の要目および「国文学史」が「古典」の成立過程においてどのように位置づけられるのかについての検討を試みたい。

2. 中学校教科教授及修練指導要目(要目⑤)における「古典」

2-1. 要目⑤と国定教科書『中等国文』の特徴

前掲の要目⑤の教授要旨の特徴は、そこに「古典トシテノ国文及漢文」という教授材料についての言及が含まれていることにあるといえる。要目①以降の国語教育関連教科の「教授要旨」は、以下の通り、「普通ノ言語文章ヲ了解シ正確且自由ニ思想ヲ表彰スルノ能」といった言語運用能力に関する記述に続き、「文学上ノ趣味」「智徳」「国民精神」といった内容が示されるというのが一貫した形式だった。

要目①②：国語及漢文ハ普通ノ言語文章ヲ了解シ正確且自由ニ思想ヲ表彰スルノ能ヲ得シメ文学上ノ趣味ヲ養ヒ兼テ智徳ノ啓発ニ資スルヲ以テ要旨トス

要目③：国語漢文ハ普通ノ言語，文章ヲ了解シ正確且自由ニ思想ヲ發表シ文字ヲ端正ニ書写スルノ能ヲ得シメ国民性ヲ涵養シ文学上ノ趣味ヲ養ヒ知徳ノ啓発ニ資スルヲ以テ要旨トス

要目④：国語漢文ニ於テハ国語ノ理會及應用ノ能ヲ得シメ漢文ノ讀方及解釈ノ力ヲ養ヒ特ニ我ガ国民性ノ特質ト国民文化ノ由來トヲ明ニスルコトニ注意シ国民精神ノ涵養ニ資スルコトヲ要ス

これに対して要目⑤は、「正確ナル国語ノ理會ト發表トノ能力ヲ養フ」「国民精神ヲ涵養シ我ガ国文化ノ創造發展ニ培フ」とあるように、従来の形式を基本的には継承しながらも、その間に「古典トシテノ国文及漢文」という教授材料が明示されている。

このような特徴を実体化したものが、この要目⑤を受けて国定教科書として発行された『中等国文』である。この『中等国文』の編纂に携わった西尾実（1944）は、『中等国文』が「古典」中心の編纂法を採ったものであると述べ、その点において従来の教科書に比して「画期的」なものであると評価している⁹⁴。実際にその教材構成は、巻頭から万葉集、古事記、神皇正統記といった教材が並べられており、明治以降の文章から徐々に近古文、中古文へと進んでいく従来の一般的な構成とは異なっている⁹⁵。『中等国文』が編纂されることになった背景について西尾は、1931(昭和6)年の満州事変以降、教育が「個人格の完成」よりも「国家的要員」の育成を直接の目標とするようになり、それに伴い教科書も「時局の要請に即応」し「国家的要請」を具現化するものに変化してきたことを挙げている⁹⁶。そして1941(昭和16)年の国民学校令以降、各学校令の第一条に掲げられることになった「皇国ノ道ニ則リテ」といふ根本方針を具現化したものが『中等国文』であると述べている⁹⁷。

2-2. 『中等国文』からの遡及

本来ならば、この『中等国文』の教材構成から、要目⑤における「古典」の様相を明らかにすることが期待されるだろう。しかし、『中等国文』は未完の状態が発行が停止したため、資料としては不完全なものである⁹⁸。そこで、要目⑤公布から『中等国文』刊行までの期間（1943(昭和18)年）に検定を通過した教科書に着目したい。これはいわば、要目⑤完全実施までの移行措置として発行され、教科書検定を通過したものである。それが以下に示すA～Eの5点である⁹⁹。

- A：『新編中等国語読本新制版』金子元臣編，6冊，1943(昭和18)年6月29日修正再版発行，同年7月7日検定通過
- B：『国語』岩波編輯部編，6冊，1943(昭和18)年7月10日新訂第二刷，同年2月13日検定通過
- C：『純正国語読本改訂版』五十嵐力編，6冊，1943(昭和18)年7月10日訂正四版発行，同年7月24日検定通過
- D：『中学国文教科書』吉田彌平編・石井庄司補訂，6冊，1943(昭和18)年7月30日訂正四版発行，同年8月13日検定通過
- E：『新制国語読本』東條操編，6冊，1943(昭和18)年8月1日修正四版発行，同年8月13日検定通過

これら5点はすべて，それより2年前の1941(昭和16)年に検定教科書の絞り込み(「5種選定」)が行われた際に採択された教科書群である⁽¹¹⁾。そしてさらに注目されるのは，これらの教科書の内容が要目④の時点から一貫していることである。今回その内容を確認することができたA，D，Eのうち，D，Eについては要目④体制下の1937(昭和12)～1938(昭和13)年において検定を通過した版と教材構成が同一だった。Aについても全教材中1教材の差し替えに止まるものである⁽¹²⁾。ここから，法令上に「古典」という語が記載されるのは1943(昭和18)年の要目⑤が最初ではあるものの，その「古典」の意味あるいは内容については，少なくともそれより6年前の要目④(1937(昭和12)年)の時点においてすでに確立していたものと考えられる。したがって次節においては，要目④における「古典」の概念についての検証を行うことにする。

3. 中学校教授要目中改正(要目④)制定の根拠と，「古典」教材の取り扱い

1937(昭和12)年に公布された要目④は，文部省が「中等学校改正教授要目の趣旨」という解説を公開しているため，その改定の意図を知ることができる。そこではまず，国語漢文科が「国民精神の涵養上極めて重大な学科目である」という認識が示され，「改正の方針」が紹介されている。そこで「改正の根本方針」の第一に挙げられているのが，「祖先の精神的遺産たる国語漢文の資料に拠つて，我が国体の本義を一層明にさせること」である。文部省解説においてはそれを以下のように詳解している⁽¹³⁾。

此の一項は，今回の改正に方つて，特に重要視した点である。国語漢文

に於ては、祖先の遺した言語・文章其のものを通して、感情的に端的に、真の皇国の姿を会得させんとするものである。萬葉集を繙く時、そこに上代に於ける我が国の真の姿を見、詐らざる国民の声を聞く。(略)千萬言を費した知的の説明よりも、真心から進り出るかうした感情的の表現が、如何に人の心を打つものであるかに重点をおいたのである。

このように要目④では、国語漢文科を「国民精神の涵養」という観点から重要視し、そこで「祖先の遺した言語・文章」によって「真の皇国の姿を会得」させるという方針が示されている。それを述べる上で、万葉集がひとつの例として挙げられているのである⁽⁴⁴⁾。

ここで着目したいのは、「国語講読」の「材料」に関する規定である。以下に下線を引いて示しているように、要目③において「国語講読」の「材料」の条件として挙げられている「総テ文章ノ模範タリ」という表現が要目④においては削除されているのである。

要目③：国語講読ハ読方及解釈、話方・暗誦・書取ヲ課シ其ノ材料ハ総テ文章ノ模範タリ而シテ国体ノ精華、民俗ノ美風、賢哲ノ言行等ヲ叙シ以テ健全ナル思想、醇美ナル国民性ヲ涵養スルニ足ルモノ、文芸ノ趣味ニ富ミテ心情ヲ高雅ナラシムルモノ、日常ノ生活ニ裨益アリ常識ヲ養成スルニ足ルモノ等タルベシ（下線筆者）

要目④：国語講読ハ読方及解釈、話方・暗誦・書取ヲ課シ其ノ材料ハ総テ醇正ナル国語ニ採リ国体ノ精華、国民ノ美風、偉人ノ言行等ヲ叙シテ国民精神ヲ涵養スルニ足ルモノ、世界ノ情勢ヲ知ラシメテ円満ナル国民的常識ヲ養成スルニ足ルモノ、文学趣味ニ富ミテ心情ヲ高雅ナラシムルモノ等タルベシ

文部省解説においては、この措置についての言及がある⁽⁴⁵⁾。

以前の要目には「文章ノ模範タリ」とあつたが、中古文や上代の文章を今日の中学校生徒に文章の模範たりといふのは妥当でないから改正したのである。

これは「国語講読」内における「国語」と「古典」の分化を明言したものと見える。つまり、要目④体制下において教科書に採録された中古文および上古文（【資料】参照）は、すでに日常的に使用する言語・文章を学習するための教材としての目的をすでに失っていると見做されているのである。そしてそれらは、「国

【資料 要目④～要目⑤体制下において継続的に採択された上古文，中古文】

	A	D	E
中古	伊勢物語，栄華物語，大鏡，源氏物語，今昔物語，更級日記，竹取物語，土佐日記，和漢朗詠集	伊勢物語，大鏡，源氏物語，古今和歌集，竹取物語，土佐日記，枕草子，山家集，金槐集，	伊勢物語，栄華物語，大鏡，源氏物語，土佐日記，枕草子，和漢朗詠集
上古	古事記	古事記，万葉集	古事記，万葉集

民精神の涵養」という目的のために採録するという認識が成立していると考えられる。

4. 「古典」概念の成立時期についての検討

4-1. 要目③制定時における「古文」の扱い

要目④においては，中古文や上古文が「文章の軌範」（つまり「国語」）とは認められず，それとは異なる目的を与えられたかたちで「国語講読」の内容として扱われていることを前節で確認した。ここには「国語」と対置された領域（つまり「古典」）が存在することが示されているのである。しかし，要目④をもって「古典」概念の成立であると結論づけることはできないように思われる。中古文や上古文を「国語講読」の内容としては認めながらも，「文章の模範」としての役割は喪失しているという認識は，すでに要目③の時点で共有されていたことが，当時の雑誌資料から推察することができるからである。

要目③の公布後，『国語と国文学』誌上において，要目③の解釈をめぐる研究会の様子が掲載されている¹⁰⁰。この中で「国語講読」の「材料」規定における「文章ノ模範タリ」という文言について藤村作，青木存義，西尾実が議論をする箇所がある。

（藤村）「文章ノ模範タリ」とあるのは，生徒の作文の基準としてのものか，さうすると古文はさうはいはれぬが，古文の場合は代表といふ意に解して差支なからうか，どうでせう。

（青木）こゝは要目を作る時にも意見があつたやうです。近来国語の教

科書は文章の如何を問はず、新しい材料を材料をと競つて採る傾向が著しく、為に随分いかゞはしい文も載つてゐるやうです。子供に読ませるとしては何処に出してもいゝ名文章を載せたいと云ふので生徒の作文の模範と云ふよりももつと広い意味があつたと思ふ。

(藤村) 模範と云ふと作るものの模範といふやうに解される。

(青木) 生徒の作る文章の模範と言ふよりも、一般的に手本となり得るやうな名文章といふ事です。古文などもあるから生徒の作文の模範と解するのは無理でせう。

(略)

(西尾) くどい様であるが、第五学年の條に「国文学ノ史的発展ヲ略述シ」とあつて、国文学といふ言葉を使つてゐるが、さうすれば下の学年でもその準備として国文学の傑作を教へて行かなくてはならぬ筈ですから、改正令の国語講読の要旨に「ソノ材料ハスベテ文章ノ模範タリ」とあるのを各時代に於ける国文学の傑作の意味に解すべきではないでせうか。

(藤村) それで私はいゝと思ふ。どうでせう。

(青木) それでいいと思ふ。

ここでは、「模範」というのはあくまで「各時代に於ける国文学の傑作」という意味と解釈するのが妥当であり、「作文の模範」という意味には解釈できないという結論に至っている。つまり、藤村が「『文章ノ模範タリ』とあるのは、生徒の作る文の基準としてのものか、さうすると古文はさうはいはれぬが」と述べている箇所からも明らかなように、日常的に使用する言語や文章を学ぶための材料として「古文」を扱うことはできないという認識が要目③の時点ですでに共有されているのである。前述のように、要目③は、要目①②においては除外されていた上古文と中古文を「国語講読」の内容として組み込んだところに特徴がある。しかし要目③における「国語講読」の内容は、上掲の議論から明らかなように、すべてが日常的に使用する「文章ノ模範」、すなわち「国語」ではないことが藤村らの議論からわかる。

4-2. 要目の改訂に伴う「国語」「古典」の範囲の変遷

ここでさらに検証が必要なのは、藤村らが議論している「古文」の範囲についてである。「作文の模範」（「国語」）となるテキスト群と、その役割を失ったテキスト群である「古文」（「古典」）との境界線の位置を明らかにすることが、この要目③の時点における「古典」概念を考察する上で必要であるためである。

要目③の時期においては、その境界線は近世と明治の間に引かれていたと考えられる。これについては上掲の藤村らの議論においては明確にされてはいないものの、要目③前後に刊行されていた教育雑誌における論稿などからその推察を導くことができる。たとえば、当時の代表的な国語教育専門誌である『国語教育』は、第10巻第9号（1925(大正14)年9月）において「現代文」教授の特集を組んでいる。この巻頭論文「現代文の取扱について」において当誌主幹の保科孝一が「現代文」を「明治・大正時代の国民文学にひろく用いられて居る文体」と定義している。そして、本号に論稿を寄せている多くの論者が「現代文」と「古文」とを区別し、その目的や内容について比較しながら論じている。「国民的自覚を喚起するが如きは古文の長ずるところ、忠実なる職務の人として実生活に資益するが如きは現代文の長ずるところ」⁽¹⁷⁾、「古文の教授は形式に重を置く傾向がある。現代文は内容に重きをおく傾向がある。」⁽¹⁸⁾などのように、「現代文」と「古文」の双方を「国語講読」の内容として設定し、対比的に論じているのである。ここから、要目③の時点においては「国語」（「現代文」）＝明治以降のテキスト群、「古典」（「古文」）＝近世以前のテキスト群という区分についての認識が成立していると考えられる。そしてこれは、今日的な意味での「国語」と「古典」の区分と共通している。

要目③以前の法令においては、この境界線の位置も、「古典」の教科内での扱いも確立していなかった。たしかに要目①における「国文学史」には、「国語」（「講読」）に対する「古典」としての位置づけを見出すことは可能である。さらに既述のとおり、「国文学史」は当初から「国民性の涵養」という目的を担うものとして設置されたものであり、この目的は要目⑤における「古典」の明示まで一貫している。しかし、要目①における「国語」（「講読」）には、今文（明治以降）に加えて、近世文および近古文も含まれていた。そのため、要目①における「国語」と「古典」の境界線は、近古文と中古文の間に引かれていたと考えられる。要目②においてもこの境界線の位置（「講読」の範囲）は変更されていない。つまり、要目

①②から③に至る過程において、「国語」と「古典」の境界線に推移が生じているのである。そして、要目③において生じた「国語」「古典」の区分がその後の法令においても継承されていくことになる⁽¹⁹⁾。

5. 結論

要目⑤において「古典トシテノ国文」という記述がなされたのは、国民科国語が「古典」を中心としたカリキュラムであることを明示するためであった。このとき「古典」という語が初めて使用され、「古典」を基軸とする教授方針が示されることになった事実は、「古典」教育史上において看過できない意味をもつだろう。しかし、「古典」概念の形成過程という観点で法令の変遷を辿る際により重要な意味を持つのは、要目③および④であろう。近世時代以前のテキスト群を「古典」として捉え、それを「国語講読」の一内容として扱うという認識は、すでに要目③の時点で共有されていた。そしてそれを法令上で明言したのが要目④であった。したがって、法令上は要目④が「古典」概念の成立といえるが、認識上における成立は要目③であったと結論づけることができる。要目⑤における「古典トシテノ国文」は、要目③④において確立された概念を継承したものとみなすことができるだろう。

このような「国語」「古典」の境界線の推移と、それに伴う「古典」の範囲の変遷の問題に加えて、「古典」概念形成史において着目したい観点は、「国民性の涵養」の扱い方についてである。要目①の「国文学史」以来、「古典」には常に「国民性の涵養」という目的が託されてきたが、その教科内での扱い方が要目の改定に伴い変遷していくのである。要目①において「講読」から独立した科目として設置された「国文学史」が、要目②における廃止を経て、要目③において「国語講読」の一内容として組み込まれることになったとき、「国語講読」は「日常的に使用する言語文章を学ぶ」と同時に「国民性の涵養」という機能を担うことになった。要目①においては「講読」＝「国語」、 「国文学史」＝「古典」であるのに対し、要目③からは「国語講読」＝「国語」＋「古典」という構図を見出すことができる。つまり、「国語」と「古典」を包摂した「国語講読」観が要目③においては成立しているのである。そしてこれが、「講読」において「古典トシテノ国文」によって「国民精神ノ涵養」を行うという要目⑤の方針に接続していく。このように、「国語」と「古典」の境界線の推移の傍らで「国民性の涵養」の扱い

方にも変更が生じている。そしてこの点からも、やはり要目③が今日的な意味での「古典」の成立時期と結論づけることができるのである。

註

- (1) 本文中でも言及しているように「教授要旨」および「教授方針」における「古典トシテノ国文」という文言が、「教授事項」においては「皇国ノ道ノ具現タル各時代ノ国文」となっている。この両者を同義と判断するのは、「教授方針」において「古典トシテノ国文」が「皇国ノ伝統ト其ノ表現トラ会得」させるための手段として示されていることによる。この言い換えは要目⑤における「古典」の定義と捉えることも可能であろう。
- (2) 2009（平成21）年に公示された高等学校学習指導要領においても、日常的に使用する言語文章（主に明治以降のテキスト群）を扱う「現代文」に対して「古典」が設置され、両者の概念区分がなされている。
- (3) 芳賀矢一は「中等教育に於ける国文学史」（『教育公報』276号、1903（明治36）年10月15日）という論稿において「中等教育に於ける所の国語と云ふもの、教授の中枢となり其の最も大切な所となるのは文学史でなければならぬのである」と述べている。これは「国文学史」が「国民性の涵養」という目的を担うためであることが本論において示されている。
- (4) 当時の文部大臣の諮問機関である。
- (5) 西尾実（1944）「中等国文（男子用）について」（『国文学解釈と鑑賞』1944（昭和19）年5月号）。なお、別稿において西尾は、明治以降の国語教育史を三期に区分し、第一期の「語学的国語教育」（明治年間）、第二期の文学的国語教育（大正年間から昭和初年）を経て、「古典」による「錬成」が中心となる第三期の「国民生活的国語教育」に到達したと述べている（『国語教育の立場と方向』『文学』第11巻第8号、昭和18年8月号）
- (6) 『中等国文』の巻一～五の教材構成は以下のとおりである。

巻一 富士の高嶺（万葉集）、産土神と氏神（芳賀矢一）、松江の暁（小泉八雲）、菖蒲の節供（島崎春樹）、姫路城、戦国の武士（常山紀談）、柿の花（正岡子規）、涼み台（寺田寅彦）、武士気質（藩翰譜）、親心（雲萍雑誌）、朝のこゝろ（橘曙覧）、泉の徳（柳田国男） 附録 全日本地図（武藤勝彦）、黒潮と親潮（日高孝次）、灯標の火（横澤千秋）、白旗の進む丘（酒井寅吉）、月を語る両提督

巻二 わたつみ（万葉集）、秋から春へ（徳富健次郎）、一門の花（平家物語）、すゝきの穂、湖畔の冬（久保田俊彦）、大君のへに（太平記）、真賢木（河合又平）、土風（駿台雑話）、馴鹿轡（中谷宇吉郎）、創始者の苦心（蘭学事始）、尊徳先生の幼時、富田高慶

巻三 宇智の大野（万葉集）、草薙の太刀（古事記）、東郷司令長官戦闘詳報、源家のほまれ（平家物語）、浮島が原（義経記）、磯もとゝろに（源実朝）、大塔宮（太平記）、文武の道（神皇正統記）、乃木將軍（森林太郎）、心の小径（金田一

京助), 学者の苦心(芳賀矢一) 明治天皇御製 附録 佐久間艇長の遺書(岩田豊雄), 俳句行(高濱清, 富安謙次), 青芝の山(矢澤邦彦), ビルマ國誕生の日

卷四 綱の音(万葉集), 大国主神(古事記), 人臣の道(神皇正統記), 菊池一族(太平記), 月天心(蕪村), 樹氷の世界(中谷宇吉郎), たぎりたつた時代の人(幸田成行) 長柄堤(坪内雄蔵), 松陰と家庭, 高名の木のぼり(徒然草), 道(芳賀矢一)

卷五 若葉(古今和歌集), やまとうた(紀貫之), 春は曙(枕草子), 国文学の伝統(芳賀矢一), 恩寵の御衣(大鏡), 光頼卿参内(平治物語), 月の前(上田秋成), 名器を毀つ(薄田淳介), 天の香具山(新古今和歌集), 敷島の道(増鏡), 吉野の奥, 説話三則(古今著聞集, 十訓抄, 宇治拾遺物語), 鞍猿, 不惜身命(山本勇造), 先達(徒然草), 奥の細道(松尾芭蕉), 固有の偉大さ(和辻哲郎)

- (7) 本文で紹介しているような状況下で編纂された『中等国文』の教材は、すべてが「『古典へ』の教材」か「『古典から』の教材」として採録されたものであると西尾は表現している。これは、卷一の巻頭において「富士の高嶺」(万葉集)に続いて、「産土神と氏神」(芳賀矢一)という教材が掲載されているように、現代文の教材も、「古典」の理解を深めるという目的のもとに採録されているということを意味していると考えられる。
- (8) 要目⑤の基調となった1943(昭和18)年の中等学校令の第一条も「中等学校ハ皇国ノ道ニ則リテ高等普通教育又ハ実業教育ヲ施シ国民ノ錬成ヲ為スヲ以テ目的トス」と示されている。
- (9) 『中等国文』は、第5巻まで発行された時点で終戦を迎え、発行停止となった。
- (10) 出版年はいずれも1943(昭和18)年。出版元はいずれも中等学校教科書株式会社(翌1944年に『中等国文』を刊行した出版元と同じ)
- (11) 内藤一志(2003)「国定教科書『中等国文』考―5種選定教科書との関連から―」『語学文学』第41号
- (12) 教科書Aの要目④体制下における版において、第9巻の「人生」(徒然草)の中に収められている「四、分を知る」が、検定校延期における版では「四、馴れたる人の」に差し替えられているのが唯一の変更である。
- (13) 増淵恒吉編『国語教育史資料』第3巻, 東京法令出版, p. 140
- (14) 要目④については、文部省解説においては「全面的検討」による改定という表現が見られる一方で、各学年の教授内容や時間数が要目③と比較してほとんど変更がないため、「現状維持」という評価を下す論者もいた。(鴻巣盛広(1937)「中等学校改正教授要目私見」『国文学解釈と鑑賞』1937(昭和12)年5月号)
- (15) 上掲『国語教育史資料』第3巻, p. 141
- (16) 「改正中学校令施行細則国語漢文科に関する研究会筆記」(『国語と国文学』1931(昭和6)年6月号)。藤村作 橋本進吉 久松潜一 島津久基 待島清九郎 次田潤 青木

存義 佐野保太郎 大岡保三 各務虎雄 湯澤幸吉郎 片岡良一 岩田九郎 倉野憲司
岸谷誠一 西尾実 浦部亀雄 笥五百里 入江相政 手塚昇 阪口玄章 形田藤太 高
野正巳 小池藤五郎 城戸甚次郎 池田亀鑑 岩淵悦太郎 笹野堅という計28名による研究会である。

- (17) 玉井幸助「現代文教授の着眼点」『国語教育』第10巻第9号, 1925(大正14)年9月1日, p.28
- (18) 堀江与一「現代文教授」同上, p.40
- (19) 「国語」と「古典」の境界線の推移をもたらし、要目③における「古典」の成立を可能にしたのは、それと対置される「国語」の範囲の確定であったと考えることもできるだろう。「現代文」という用語が国語教育の中で安定的に使用されるようになるのは大正中期以降とされている(野地潤家(1998)『中等国語教育の展開』溪水社)。その契機となったのが口語文体の確立であり、それによって「国語」=現代文(明治以降), 「古典」=近世以前という区分が可能になったのである。

参考文献

- 内藤一志(1990)「古典教材史の基礎的研究2—出典調査(1)による考察と補遺—」『人文科教育研究』第17号
- 吉田裕久(2007)「『中等国文』(1943)の編纂過程—「森下日記」の分析を通して—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』第56号
- 吉田裕久(2008)「『中等国文』(1943)の研究—編纂理念と指導法を中心に—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』第57号

An examination of the period when the concept of Japanese Classics was introduced to the Japanese educational system

Yuichiro YAGI

This report examines when the concept of Japanese Classics was introduced to the Japanese educational system. Research methods included analysis of factors that caused systemic changes in Japanese Classics based on various data and a detailed investigation of the changes in the composition of educational materials in text books. Japanese Classics were first introduced to the educational system in 1944, an educational system implemented during the Pacific War. As the war intensified, a curriculum was created in order to raise the people's level of patriotism. At that time, the keyword was Japanese Classics. With Japanese Classics, the aim was Cultivation of Nationalism of the Japanese people. Japanese Classics were regarded as important to the system of 1944. However, when referring to the concept of the introduction of Japanese Classics, it is important to note the systems of 1937 and 1931. First, a policy that considers Japanese Classics important to the Cultivation of Nationalism was already manifested in the system of 1937. This is from the explanation of the Ministry of Education, Science and Culture at that time. Furthermore, the concept of Japanese Classics was an already shared idea among leading scholars of the time, as known from a discussion of the introductory process to the educational system of 1931. Therefore, we arrive at the conclusion that the concept of the introduction of Japanese Classics to the Japanese educational system can be traced back to 1931.